

社会のために学会員の 知識創造を支援する学会



野生生物保護学会
会長 敷田 麻実
(北海道大学
観光学高等研究センター 教授)

学会の組織図を見ると、組織は会長を頂点とし、その下に理事がいて、大勢の学会員がいるピラミッド型のヒエラルキー構造であることが多い。

しかし、学会の設立目的である知的創造の主体は学会員である。学会員の日々の知識創造活動そのものが「学会」だと言ってもいいだろう。学会員は学会誌への投稿論文や学会発表によって知的創造の成果を表出する。学会はその場を提供しているに過ぎない。表現者は学会員である。

昨年まで野生生物保護学会の役割は、知的生産者としての学会員の支援だった。つまり学会員の知的生産のために会員間の交流を活発にし、学習の場を提供し、学会誌という自由な表出と知識蓄積の場を創ることだった。

このように過去形で書いたのは、野生生物保護学会では、今までの学会の役割から一歩踏み出して、知識創造現場から社会への「説明」を始めたからである。その試みがフォーラム誌である。この雑誌は野生生物保護・管理にかんする知識を、誰が、何のために、どうやって創り出しているのかを、学会員以外に説明する媒体なのだ。

しかしそれ以上に重要なのは、社会と学会の関係を考えることだ。フォーラム誌を創る時、読む時、配布する時、そこには学会と社会の関係を考える機会が生まれる。

2008年、野生生物保護学会は社会との関係の「再構築」をさらに模索する。

「今号のトビラ問答」

「ネズミの食べ物と、

ネズミを食べる者は??」

Q スナネズミですね。ネズミの仲間は世界中にたくさんいるのですか？

ネズミは哺乳類の中でも最も優勢なグループで、ネズミ目だけで哺乳類の種の過半を占めます。昆虫食を行う種もありますが、多くは種子、果実を中心とする植物食で、典型的な一次消費者といえるでしょう。ネズミを食べる動物は、イタチ科の小型哺乳類や猛禽類などで、ネズミの種数の多さからも、この捕食・被食関係は生態系の重要な構造であると考えられます。

(写真と回答・須田知樹・立正大学地球環境学部講師)

